

ほど敷いてみました（堆肥マルチ）。カンナクズは分解がかなりすすんでいます、まだ微生物のエサになる養分を残しています。それが湿り気のある土の上に置かれ、微生物活動が再開されたのでしょう。翌日には白い菌糸でおおわれました（右の写真）。

その菌糸のあるところをクローズアップすると、右下の写真のように、コナダニやササラダニなど足が短くゆっくり歩くダニがたくさん現われて、菌糸や分解中のカンナクズを食べて繁殖します。そして、足が長くすばやく走る捕食性のトゲダニもやってきます。トビムシやセンチュウ、ミミズも現われ、まさに生きものワンダーランドです。

糸状菌や放線菌・細菌などの微生物と、土ダニ・センチュウ・ミミズなどの小動物。これらが、自然界でいのちの循環を持続させる主役です。

■ 偉大!! ミミズによる天地返し

たとえば、森の土には、人の足跡ひとつの広さにササラダニだけで 1000 ～ 1 万匹がせっせと落ち葉を分解しています。また、ミミズは土を食べて糞を排泄することで、土の団粒化を促し通気性・保水性のよい土壌をつくることがよく知られていますが、クソミミズは、クローバー草地で春から秋の 6 カ月弱の間に、1m² 当たり 4kg 近い土の糞を表面に出したと

いう調査があります。土中の糞はその何倍にもなるでしょう。「ミミズによる団粒化同時天地返し」が太古から続けられ、地球の健全な土ができています。



土の団粒化と天地返しを
営々と続けるミミズ



クモもふえる。ハモグリ
バエの幼虫を捕食するの
を目撃した人も



分解・発酵 1 日目

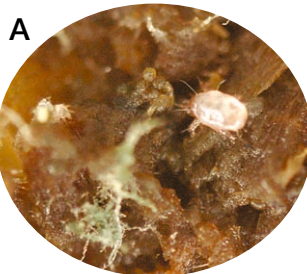
30 日目

90 日目



土に敷いた堆肥は 1 日で菌糸におおわれた

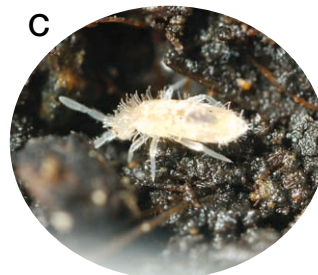
堆肥のまわりは微小生物のワンダーランド



A. 砂糖菓子のような菌
糸にやってきたコナダニ



B. 捕食性のトゲダニも
現われた



C. 土中のプランクトン
といわれるトビムシもい
っぱい

良質堆肥の活用は、このような自然界の生物たちによる資源循環と生態系のバランスに学びながら、その恩恵を少しでも多く農地に再現しようというものにほかなりません。ある生産者は、「堆肥マルチを行ったら、野菜や花の葉に幼虫がもぐり込んで食害するマメハモグリバエの被害が減った。幼虫をクモがくわえて走るのを目撃した」といいます。